

オスカー・ルイス

開かれたフィールドワークへ

小林多寿子

一橋大学大学院社会学研究科 教授

オスカー・ルイス (1914-1970) は、コロンビア大学でルース・ベネディクトのもとで学び、イリノイ大学人類学部で創設時より研究教育に携わった文化人類学者である。アメリカ国内やカナダ、北インド、メキシコ、プエルト・リコ、キューバ等で幅広く現地調査をおこなった徹底したフィールドワーカーであった。1943年以来、メキシコの山村とメキシコ・シティでの調査をもとにした『貧困の文化』(1959, 訳, 1970) と『サンチェスの子供たち』(1961, 訳, 1969)、プエルト・リコの家族を描き、1967年の全米図書賞(科学・哲学・宗教部門)を受賞した『ラ・ビーダ』(1966, 訳, 1970; 1971) がもっともよく知られている。調査の達人としてのルイスは、とりわけこれらのエスノグラフィに傑出した才を示した。

『サンチェスの子供たち』は、メキシコ・シティの共同住宅の一間に暮らすヘスス・サンチェスとその四人の子供たちの物語である。ルイスは、大都市の下層家族の生活とそこで成長することの意味をとらえるために、家族一人ひとりに自分の言葉でライフストーリーを語ってもらい、重ね合わせて提示する「複合的自叙伝の方法」で、個人の自伝的語りだけで構成する斬新な作品をあらわした。子供たちは貧困のなかでの暴力や犯罪、病気や死を語った。嫉妬や疑念、憎しみや狂気に満ちた怒り、絶望等、さまざまな感情がもつれあう、痛々しさに満ちた語りの集積はいまも読むものを圧倒する。

『サンチェスの子供たち』と『貧困の文化』は、ナラティブ・アプローチによるエスノグラフィとしてだけでなく、映画や音楽という芸術の手法の応用や調査のコンテキストの開示を作品にとりこんだ点にも先駆的特徴がある。とくに映像的手法でもっとも

知られるのが「羅生門」式手法である。映画『羅生門』(1950, 黒澤明監督) にヒントを得て、複数の語りの重ね合わせによって出来事の多面性を描きだすやり方であり、問主観的な現実を個人的語りによって呈示しようとする現象学的な手法でもあった。もう一つ、『貧困の文化』でとられたのが、典型的な一日に照準するという方法である。五つの家族それぞれのある一日、早朝の目覚めから眠りにつくまでの一日を、人びとの会話や行動の描写を微細に重ねながら描いている。さらにその記述のなかに過去を回顧的に語る自伝的語りを挿入する「フラッシュバック方式」を取り入れた。この方法もまたユニークな芸術的手法の応用であった。

ルイスは『サンチェスの子供たち』の「序」で、サンチェス家との出会いやインタビューにいたる経緯、インタビューの方法、語りを出版形式に編集するところまで詳しく書いており、語りのコンテキストをフィールドワークの記録のなかであきらかにしている。さらに原資料に興味をもつ研究者にはインタビューテープを貸してもいいとも記している。

ルイスの助力者であった妻ルース・ルイスの没後、イリノイ大学アーカイヴズに「Oscar and Ruth Lewis Papers, 1944-1976」としてインタビューテープやフィールドノート等の調査資料がアーカイヴ化されている。作品刊行当時からルイスの調査と作品をめぐる、絶賛と批判という対極的な議論を引き起こした。ルイスの没後、半世紀近くたった現在、オリジナルなフィールドワークのデータに遜ることのできるアーカイヴ化は、1980年代初めにライフストーリー・リバイバルへの契機となり質的調査の転換点をもたらしたルイスの調査と著作への、新たな読み直しの可能性を開くものであろう。



Column
調査の
達人

中野 卓

『口述の生活史』(1977年)の衝撃

有末 賢

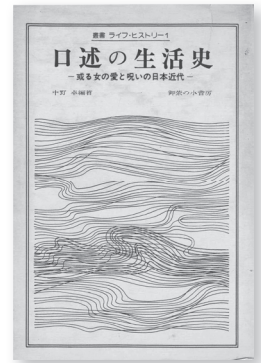
亜細亜大学都市創造学部 教授

中野卓(1920~2014年)先生は、東京教育大学で長く社会学を教えられた。東京教育大学が廃校となった1978年以降も千葉大学、中京大学において社会学の研究・教育に従事されたので、多くのお弟子さんや教え子が日本社会学会で活躍されている。「調査の達人」としての中野先生を語るべき人は、鳥越皓之氏、桜井厚氏をはじめとして教育大門下など数多いものと思われる。慶應義塾大学出身の私が出る幕ではない。ただ、1981年11月に始めた「生活史研究会」の事務局を16年間担い続け、研究会を慶應義塾大学で開催してきたことが、毎回必ず出席してくださった中野先生と交流できた貴重な機会となったと思う。

中野先生の主著『商家同族団の研究』(1964年)は、200年近く続く京都の葉問屋の中野家の同族団を歴史的に調査研究したモノグラフである。農村社会学者、有賀喜左衛門の家・同族研究を京都の葉問屋という都市の商家に当てはめた研究であり、家研究の金字塔として、今でもその業績の輝きは消えていない。しかし、『口述の生活史——或る女の愛と呪いの日本近代』(1977、御茶の水書房)の出版は、ある意味で衝撃的であった。ちょうど私が学部を卒業して大学院に入学した頃であったので、「おばあさんの『語り』をそのまま本にした『口述の生活史』が社会学になるのだ」という発見は驚きであった。当時、東京都立大学大学院で学んでいた桜井氏と、倉沢研究会でお会いして、中野先生の『口述の生活史』で意気投合して、「生活史研究会」を立ち上げる話になったのである。現在は、大正大学の井出裕久さんに引き継いでもらっている。「『調査の達人』としての中野卓」を考えた場合、私の観点からその特徴を3点ほど挙げてみたい。

まず第1には、生活史を語ってくれる話者(対象者)への特別な「ほれ込み」である。生活史研究会には、中野先生の奥様もご一緒に参加されていたが、水島(岡山県)に住むおばあさんへの「ほれ込み」、

また次には、ハワイの日系女性・立川サエさんへの「入れ込み」ように話していたのが印象的であった。ライフヒストリーは、その人の話に夢中になって聞いていかなければならない。当たり前なことだが、調査の原点として非常に重要である。中野先生の時代には、テープでの録音が可能になり、自分の質問と相手の答え、長い話なども正確に記録できるようになった。佐藤健二氏も指摘している通り、柳田国男や有賀喜左衛門の時代には無かった技術である。中野先生は、録音という技術を使って生活史(ライフヒストリー)を織り上げていった。



第2の特徴は、歴史文書を駆使し、再構成するという方法である。『鯉網の村の四〇〇年——能登灘浦の社会学的研究』(1996年)は歴史社会学の大著であるが、この中にも全頁の高橋雄次の生活史が隠れている。インタビューをしなくても生活史研究は可能なのである。生活史研究は、歴史研究ないしは歴史社会学のカテゴリーの中で考えられていた。

第3の特徴は、中野家や身近な家族、親族の資料や自分自身の生活史までも調査研究に仕上げていくという方法である。『明治四十三年京都——ある商家の若妻の日記』(1981年)は、自分の母親の日記であり、『中学生のみた昭和十年代』(1989年)と『学徒出陣』前後』(1992年)は、自らの日記が資料となっている。質的調査は主観性が基本である。自らの主観的視点が基点となって、質的調査研究が始められるという考え方であったのである。その意味で、調査の基準を自分自身の身近な人々に置いたことが中野先生の卓越したところであった、と思われる。